

需要家のためのIB.ニュース

シグマ

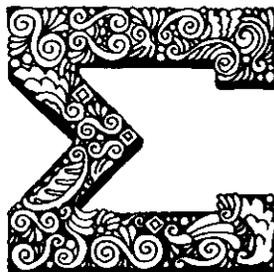


【IB】イワタボルト

1978. 7

NO. 26

[18]



誌名〈シグマ〉の由来

〈シグマ〉はギリシャ語のアルファベット第18番目にあたる Σ (sigma) から取ったものですが、 Σ は微積分では総体の和を表わす記号ともなっております。そこで、1) 「ねじ」は物を締めつけて完成品に仕上げる重要な部品ですから、総体の和を支えるものといえます。そして 2) 私たちは、総体(トータル)でのみ、伝票では買えないものをサービスして、総体のコスト(トータルコスト)を下げることに協力します。このためには、3) 「ねじ」を供給する私たちと、それを使用される皆さんとの間に、密接な和を必要とします。こうした私たちの3つの願いをこめて名づけられたのが〈シグマ〉です。

シグマ No.26 目 次

〈シグマ〉海外報告
1978年デザイン・エンジニアリングショウに参加して
エレクトロニクスの利用分野更に拡大…………… 1
一段と強まる締結のシステム化傾向
イワタボルトは6回目の出品

〈シグマ〉海外ニュース
米国のねじ輸入問題のその後
舞台は再び I T C に …………… 6
政府と議会の政治的な駆け引きの波間にゆれる
戦争になったらどうねじの需要を確保する …………… 9
米国防省が2年越しの調査

25th DESIGN ENGINEERING SHOW and ASME Conference

McCORMICK PLACE, CHICAGO
APRIL 17-20, 1978

(シグマ) 海外報告

1978年デザイン・エンジニアリングショーに参加して

エレクトロニクスの利用分野更に拡大

一段と強まる締結のシステム化傾向
イワタボルトは6回目の出品

1978年のDesign Engineering Show が、今年もシカゴのマコーミックプレースで、4月17日から20日まで4日間にわたり行われた。ASME (米国機械技術者協会) Design Engineering Division主催で、同時にDesign Engineering Conferenceも併行して開かれた。このショーも今年は25回目というから、事実上戦後の米国のデザインエンジニアリング発展の歴史を歩んできたわけである。出品企業は500社近く、出品点数も2万点をこす華々しきで、とくにコンファランスでは25回目を記念して新しくレオナルド・ダビンチ賞を設け、技術の発展に貢献したエンジニアに授賞するなど、例年にない活気と話題にあふれていた。イワタボルトでは例年のように各種の特殊ファスナーを展示したが、勿論日本のねじ企業として唯一の参加であった。

今年で6回目を迎えたこの出品の責任者として、イワタボルトでは名古屋出張所所長代理の南康次郎を派遣し、通訳として本社から岩田聖隆 (経理課) を同行させたが、現地では現在ミシガン大学に在学中の岩田雅隆氏 (岩田社長次男) も参加した。

以下は南による報告の概要である。

一段と強まる ファスナーとツールのシステム化の方向

4月8日に羽田を出発し23日に帰着するまでの約2週間、取引先への訪問や打合せで飛び廻る中をシカゴのデザイン・エンジニアリングショーの出品の責任者として参加して来ましたが、以下はその報告の概要です。これ迄何人かの諸先輩が参加されたことでもあり私も事前に何かと下調べをしていった積りですが、実際に参加してみると下調べはどっかへ吹きとんで色々な印象をどうまとめるかに一苦労します。ただ今年度の参加には語学も達者で渡米の経験豊富な岩田聖隆氏がたえず傍に居られるし、またミシガン大学留学中の岩田雅隆氏が現地で参加されるし、更にショーには参加されなくともロサンゼルスの出張所には荻生田所長が居られるといった具合で、何かにつけて心強い思いをしました。

ショーは4月17日から20日までの4日間、例年のようにシカゴのマコーミック・プレースで

開かれましたが、会場の大きさは勿論展示の規模と内容のすばらしさにうたれました。今年は25回目にあたるということで例年以上に力をいれていると聞きましたが、これを記念して今年から、デザインエンジニアリング分野に貢献したエンジニアにレオナルド・ダビンチ賞が贈られたといわれます。それほどこのショーは米国では科学技術展示の年中行事として注目もされているようです。

出品企業500社、出品点数は2万点をこすといわれ、4日間の来訪者は数万名ということを知りました。展示内容は機械伝導装置、電子機器、電子制御装置、各種工業材料、締結システムと各種部品等々最新の技術レベルを示すものばかりです。われわれに関係の深いファスナー関係の出品もきわめて多く、中には日本にもお馴染みの製品もかなり見うけましたが、大体が初めて目にするものばかりです。

その中でとくに印象に残った点をいくつかあげますと、まずブラインドリベットやナイロン製ファスナーの展示商品が多いことです。ブラ



インドリベットは日本でもかなり普及していますし外国製品も何種類か入ってきていますが、ここで見ると、まだこんなにもあるのかという感じです。単にブラインドリベットだけでなくブラインドボルト、ブラインドナットなどまでいれると、これらを総合したブラインドファスナー分野の広さに驚きました。用途とか使用箇所に応じて、また機能に応じて多面的に開発されているという感じです。またナイロン製ファスナーの種類の多いのも目立ち、日本でも数年来かなりの普及をみるとはいうもののその比ではないようです。

更に、ファスナーと締結工具をシステムとして展示しているのも特徴的で、イワタボルトの掲げるソフィはやはり時代の方向なのだなど、心強く思いました。

いろいろと目についた新製品のひとつに、ミルフォード・リベット&マシン社のブラインドリベ

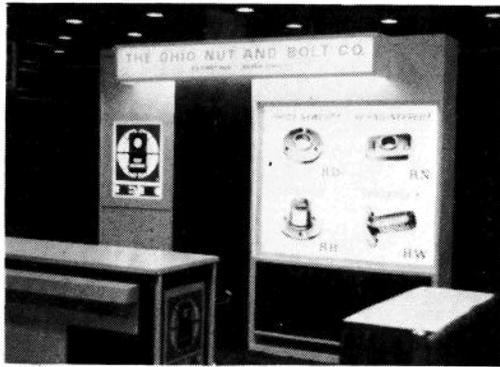
ットがあります。イワタボルトがエージャックスのブラインドリベットやM-Fピアシングナットを扱っている関係からか、とかくこうしたものが目につきます。これは、ピアシングナットと同じように下穴をあけずに、リベットそれ自体が下穴あけし相手材を貫通しないで背面で相手材が膨張してリベット先端を保持するようになったものです。ピアシングリベットということでしょう。なお、ミルフォード・リベット社というのはセミチューブラリベットやリベットセッティングマシンの有力メーカーですが、数年来ブラインドリベットの分野にも大きく進出し、切断マンドレルの吸引装置を直接リベッターに装着した手軽なシステムを開発しているといわれます。

また意外に思ったのはハトメやカシメピン類の展示が多い点です。日本でこうした製品になるとどこで作っているのかも余りはっきりしま



★今年もまたラインヘッドのパネルが人目をひき、好奇と関心の質問が相ついだ。

せんが、このショーで、しかも技術の先端を行くこのショーでこんなに展示されているのを見ると、一体何故だろうと考えさせられました。恐らくツールとシステム化したものとしての商品であり、ブラインドリベットやブラインドナット、またピアシングリベットと同じような考え方がその底に流れているのではないかと思います。つまり締結や接合の合理化であり省力化であり生産性の向上です。これはツールとの



★何気ない製品の何気ない展示にも心憎いばかりの細心の配慮が行きとどいている。

一体化なしには考えられないことです。だから米国では日本のように、リベットとツールのメーカーが別個に存在するのではなくて、リベットのメーカーがツールも開発しツールのメーカーがリベットも作るという風に、全体を総合的に考えそれを製品化していつているのだと思いました。これが本来の意味のシステムです。

こうした考え方があるからこそ、リベットやハトメ、カシメピンといった昔からの製品が姿をかえ装いを新たにして生れ変わって来るのだと思います。このようなことを考えさせられただけでも、このエンジニアリングショーに参加したことの意味の一つがあったと思います。

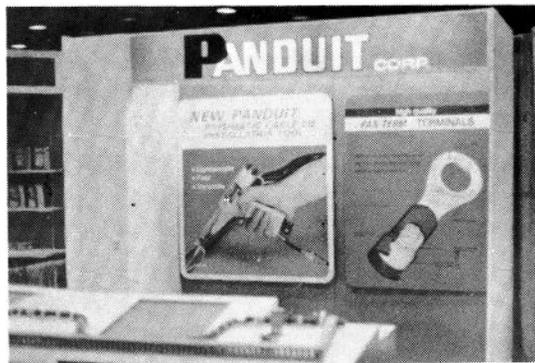
イワタボルトはラインヘッド、レンビスその他を展示 外国人と日本人の見る眼の違いを痛感

さてイワタボルトはこのショウにラインヘッドを始めIT3、ドライブナット、レンビスその

他各種の特殊ものを展示しました。例年と同じようにわが社の企業カラーともいえる黄色にラインヘッド・ファスナーを大きく浮び上げたパネルは、このショーのファスナー関係でも目立っていました。とくに“The Metric Fastener You Need Now.”という文字は、米国がメートル移行を積極的に進めているだけに、我田引水のようなのですが、印象的なものがありました。ファスナーのように製品それ自体も小さく目立ちにくいものの展示は、パネルにせよその図案や配色にせよ、人目につくということがこの種のショーできわめて必要なことと痛感させられます。その意味では出品各社とも、想をこらしているという感じです。

イワタボルトの出品では、ドライブナットやボタンヘッドのキャップスクリューその他、色々質問やら関心を呼びましたし、サンプルなどもまたたく間になくなってしまいました。ことにラインヘッドに対する興味が一番多かったのではないかと思います。これは例年のことで

すが、この種製品に対する見学者の見る眼が違うなと思いましたし、日本ではこれ程にはいかないのにと何か複雑な思いでした。どうも日本では、外国産のものに対しては一目（いちもく）おいてみる傾向があるのに対し国産のアイデアにはいささか冷やかな感じがします。その点、外国ではそれがどこで作られようとそのアイデアや中味に関心をもち、自分らの抱えている問題とからめて考えるという傾向があるのではないかと。そういえば、ファスナーに限らず開発されたアイデアなり製品が初め外国で注目され、徐々に普及し出すと今度は日本に逆流する例が多いと聞きましたが、そうかも知れないと感じました。その意味ではイワタボルトが、例年のようにこれでもか、これでもかとラインヘッドのパネルを掲げサンプルを並べて来た成果が日本より先に米国で実を結ぶのではないかと感じました。



★ファスナーや接合部品はツールと一体化してシステム化の方向を辿る。

コンファランスではテンション・コントロールシステムもテーマ

このデザイン・エンジニアリングショーでは米国機械技術者協会 (ASME) によるデザインエンジニアリング・コンファランスの開かれるのは例年の通りです。今年はエンジニアリング・マネージメント、材料、動力伝導と部品、電子工学、油圧と水圧、設計分析の6つの分野に分れ、それがまた夫々の分野の中でいくつかの細かいセッションに分れて、報告や討論が行われました。ファスナー関係では4月19日の午後3時半から5時半まで2時間にわたり、次のテーマの下に討論が行われました。

★最新の締結構想の効果的な適用について

これは有名なパッテル・コロンバス研究所のファスナー関係担当のステファン・フォードという人の報告です。

★新しい締結技術

案内書にはSPSの技術者ロバート・フィンケルストンの報告となっていました。実際には有名なG.H.ユンカーが軸力管理について報告しました。

★多列ボルト接合体の分析方法

これもSPSの技術者ラッセル・ハーデマンの報告です。

この会議には、現地で参加された岩田雅隆氏が出席しました。これまでコンファランスがあっても、諸先輩何れも語学は不得手、技術も苦手ということで切角のチャンスを逃して来たわけですが、今回初めてそのチャンスがものにされたわけです。

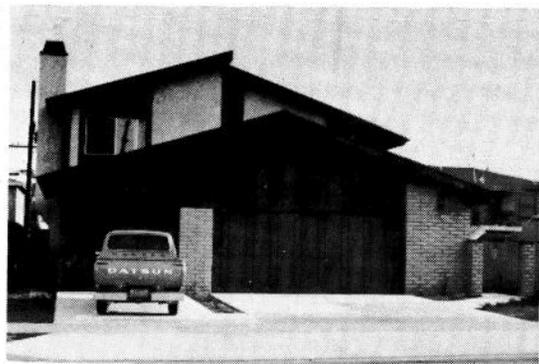
もちろん最大の関心は第2番目のテーマです。というのは、〈シグマ〉No.25の特集でも御承知のように、雅隆氏はねじ締付管理の中でここ数年来注目されている軸力管理法 (テンション・コントロールシステム) について最新の外国文献を翻訳紹介しているだけに、「新しい締結技

術」という、そのものズバリのテーマが関心の対象になるわけです。

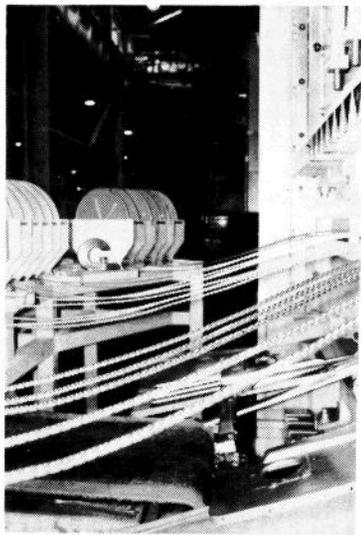
聴講の感想によると、報告者が予告と違って有名なユンカーであったのは意外だったようです。ユンカーというと、元ドイツ・アンブラコでゆるみ止めや締付管理の理論的指導をし国際的にも著名な存在ですが (現在はアンブラコを離れE.E.Cの規格関係責任者の立場にある)、同氏はSPSのエンジニアとニュージーランドの大学教授との共同による報告書「ファスナー締付けの自動管理システムに関する設計と性能」に基いて、SPS開発のジョイント・コントロールシステムを中心にその原理や機構、システムなどを要約的に報告したわけです。ただ内容的には、先に〈シグマ〉で紹介されたもの以上に出なかったというのが、雅隆氏の感想でした。

ただ今度の報告などを通じて、新しい軸力管理法が私たちが想像する以上に着々実用化され普及をみせる傾向にあり、ねじ締付けも従来のトルク管理法から移行しつつあるという時代の流れを感じたといっていました。軸力管理については私が生かじりの知識を述べたてるよりは〈シグマ〉No.25を読んで頂いた方が良いと思いますので、これ以上ふれません。

ただ私がいかにこれらに関連して感じた点を若干申し上げますと、一つはSPSという企業がねじの製造や締付の技術や開発についてたえず一歩先じた道を歩みつづけている点です。今度のコンファランスのファスナーに関するセッションでも3人の報告者の中2人がSPSです。従来のデザインショウのコンファランスでも必ずSPSの技術者が報告しているという話を聞いております。最近SPSは、社名を従来のStandard Pressed Steel Co. からSPS



★(左)イワタボルトのロサンゼルス駐在事務所と(右)萩生田事務所長夫妻。



★某大手工場で10数連のリールからM-Fピアシングナットの自動取付けが行われていた。

Technologies Corp.に変更しましたが、さもありなんという感じです。今一つは、エレクトロニクスの利用分野の拡大とそれに伴ういろいろな機器の性能の飛躍的向上です。新しい軸力管理法の開発をみてもそれがエレクトロニクスがなかったら実現できなかったろうといわれます。つまり軸力管理の原理であるねじの降伏点締付を電子的にモニターして、降伏点の検知と締付工具停止の瞬間を決定する方式だからです。

このエレクトロニクス利用分野の拡大は今度のデザインショウの展示の至る所にみられたし、コンファランスでもそれに関するテーマが多かったようです。

以上、きわめて一般的なものになりましたがデザインショウへの参加の報告です。

なお余談ですが、このショウで韓国の自動車メーカーとしてトップを行く現代自動車工業の技術者とたまたま会う機会がありましたが、彼の話によると同社では三菱自工よりエンジンを輸入して「ヒューデンボニー」を生産し、中南米や欧州に輸出しているとのこと。生産台数は去年は年間10万台だったが今年は50万台を予定

し、5年後には日本に追いつきたいと話していました。今後日本のライバルになるなど感じましたが、海外に出ると日本製品の進出の華々しさの反面、これを追いこそうとする国々の競争意欲の激しさを身にしみて感じます。

私たちが米国に滞在して取引先その他を訪問中、日本のねじ輸入問題の話がちよいちよい出ました。カーター大統領がITC勧告を拒否した最大の理由は、日本の円高で今後日本の米国へのねじ輸入は自然に減少するだろうという予想によるようです。これに対して下院などでこの決定をくつがえすべくいろいろな工作が行われているようですが、こうした判定がくつがえされた例は過去にないと聞きました。この一方、今後戦争が起った場合、米国でのねじ生産が特殊ものに移行しているため、国防上問題が起るだろうとのことで、遊休設備の状態や特殊ものから規格ものへの切りかえが可能かどうかなど、調査が行われていることも話に出ました。ねじの問題が国防上の問題とからんで調査が行われ

(P.9上へつづく)

米国のねじ輸入問題のその後

舞台は再びITCへ

政府と議会の

政治的な駆け引きの波間にゆれる

日本では殆んど新聞にも出ませんし関心も持たれておりませんが、現在米議会では日本その他からの輸入ねじの問題が政治的な様相をこくし、その成行きが注目されております。それは輸入ねじの問題が米国ねじ産業にいろんな影響を及ぼしてきていることでもあります。政府と議会筋との政治的な駆け引きに利用されそれに巻きこまれている、むしろそうした色あいが強くにじみでている点も見のがすことができません。それは一体どんな意味なのか。

事はカーター大統領が2月10日、ITC（国際貿易委員会）の勧告を拒否したことに始まります。このITC勧告は輸入ねじに対して初年度30%に始まり最終年度が20%と5年間にわたる関

税引上げを勧告したものです。この勧告は、米国内産業界や議会筋での保護貿易的気運、日本の黒字累積に対する批判的空氣が強い折だけに、内容的に若干の手直しはあっても大統領がOKするのは殆んど確実とみられていたのですが、意外にもこれが拒否されるに及んで問題はややこしくなりました。何故大統領が勧告を拒否したのか、それがその後の事態にどう影響してきたか。その前にITCが関税引上げを勧告するまでのいきさつについてふれておく必要があります。

これまでのいきさつ ITC公聴会における双方の主張

米国ねじ業界が輸入ねじに対して反撥を示したそもそもの始まりは今を去る20数年前の木ねじの輸入制限問題にさかのぼりますが、それはさておいて最近では昭和50年（1975年）にIFIが中心になりITCに対し、1974年通商法第201条のエスケープクローズに基きボルト・ナット・スクリューの輸入を1972年の水準で5年間規制するよう要請したことは記憶に新しい所です。結局この要請は3対2（棄権1）で却下されましたが、IFIは明けて昭和51年（1976年）早々、日本製品を対象に1930年関税法第303条による相殺関税適用を財務省に要請しました。これは財務省の認める所となり昭和52年（1977年）5月からボルト・ナットに若干の従価税が賦課されることになりました。然しIFIにとってはこれは、次の第3弾への時間稼ぎの意味もあったようです。

こうして同年6月下旬、ねじメーカー23社が米国ファスナー製造グループを結成し、合同鉄鋼労連と国際機械・航空機労組と連名で、再び1974年通商法201条による輸入救済をITCに要請しました。対象品目は前よりぐっと絞ってボルト、ナット及び0.24"以上のスクリュー。

この要請をめぐる公聴会が9月下旬ワシントンで2日間にわたり開かれました。これには提訴された側では、インポーターが米輸入業者協会工業ファスナーグループを結成、また日本からは日本ねじ工業協会と日本機械輸出組合、この外台湾と印度からも夫々の証人を立てて公聴会に臨みました。

この公聴会での双方の証言と質疑応答は、米国における輸入ねじの問題のありかを知る上できわめて興味深いものがあります（「ねじの世界」77年12月号～78年4月号に連載）。

ここで双方の証言と主張を要約するとこんな風になります。

〈提訴した側〉

- ① 外国とくに日本からの輸入増大で米国市場における外国製品のシェアが大巾に増えたばかりか幾つかの工場が閉鎖を余儀なくされ失業者が生れた。
- ② ねじ企業の業績が悪化し利益率が大巾に低下した。
- ③ そのため特殊もの市場への進出を余儀なくされた。
- ④ 所がその特殊もの市場へも外国製品が安値で進出し出し国内メーカーをますます苦境に追いやっている。

〈提訴された側〉

- ① 外国製品は増大しているが、工場閉鎖や失

業者の発生は国内メーカーの合理化や生産性向上から生れたもので、そうでない場合は情勢の変化に対応できぬ経営の不手際が原因である。

② ねじ企業の業績は景気が好転していない時でも、金属製品業界の平均を上廻るものがあった。

③ 特殊ものは自動車その他OEMの要求から生れたもので、附加価値も収益性も高いこの分野にねじ企業は相ついで進出した。そのため業績も上った。

④ OEMの要求する特殊ものは品質管理や納期の上で外国製品の進出は不可能である。

ごく大ざっぱにいうと以上の通りです。まとめてみると味も素気（そっけ）もなくなります。個々の証言や質疑応答を読むと誠に興味深いものがあります。あるメーカーは、少くとも標準ものに関しては国内で生産しても採算がとれず工場の縮小を余儀なくされ、止むなくその分は輸入品に切りかえた、われわれは輸入業者になり下ったと切々訴えています。輸入品への切換えで業績が上ったことには目をつむる光景もあったようです。また、メーカー側からインポーターは需要の過不足に乗じて市場を攪乱しているという非難が行われたのに対し、インポーターからあなた方はデストリビュータが国内メーカーをどうみているか知らないのかと反論するあたりも、中々見物（みもの）です。つまりデストリビューターは国内メーカーがとくに少しでも忙しくなると、相手にしてくれないし製造スケジュールの中に組み入れてくれないと不満をもちやすことが多い、というわけです。

この公聴会にもとづいてITCは審議を行った

結果、12月6日に3対1（棄権1）の票決でクロと判定されました。輸入による被害又はそのおそれありということになったわけです。そして現行の税率に加えて初年度と第2年度が従価30%、第3年度が25%、第4年度と第5年度が夫々20%の関税引上げを行うよう勧告が大統領に提出されました。

意外だった米大統領のITC勧告却下 国防上の理由による調査を別途指示

この勧告に対し米ねじ業界は一応歓迎したもののこれでは不充分と、ボルトに対しては50%関税引上げ、ナットに対しては数量規制をすべきだと政府筋に働きかけました。

所が意外や意外、ITCの勧告そのものが大統領から完全に拒否されてしまったわけです。その理由についてシュトラウス通商特別代表はこう述べています。①関税引上げによる製品値上りがインフレを促進し逆に他の産業に失業を引き起す可能性がある。②日本の円高で国内メーカーの競争力は強まるはずだ。③自動車向けなどの特殊ファスナーを救済から除外するわけにいかないとする、不必要な保護を与えることになる。④トリガー価格の実施で輸入材料の価格が上昇しても国内材料への依存度が80%と高いので影響は少ないはずだ。

まことに論理明快ともいうべき理由です。この中で4番目のトリガー価格云々について若干説明を加えておきます。これは周知のように日本などからの鋼材の輸入を制限するために基準価格を設けることを云うのですが、このトリガ

ー価格制が実施されると、国内材料より割安な日本の材料への依存度の高いねじ企業はそれだけメリットがなくなるわけです。それだけでなく、日本側は輸出材料の減った分をねじ製品に形を変えて米国市場に大量に送りこんでくるだろうというのです。だからねじなどの2次加工製品に対してもトリガー価格を適用し、安い材料を使えないようにすべきだ、というのが彼らの要求です。財務省辺りでは、そんなややこしいことは不可能だといってはねつけていますし、シュトラウス通商特別代表も斥けたわけです。

このように大統領はITC勧告を却下しましたが、同時に国防上の理由でねじ産業を保護する必要があるかどうかについて、別途財務省に対して1962年通商拡大法232条に基いて調査するよう指示しました。

勧告却下をめぐり下院の動き2転、3転 舞台は再びITCに

この大統領決定が米ねじ業界に大きな衝撃を与え激しい憤まんを巻き起したのは当然です。ねじ企業の多いオハイオ州出身の2人の共和党下院議員がその意をうけて直ちに行動を開始、大統領決定を覆がえす（オーバライド）べき動きに出ました。まず2月27日には下院歳入委員会貿易小委員会でもオーバライド決議案をめぐる公聴会を開き、ついで3月14日の小委員会でも7対6でこの決議案を可決、歳入委員会に送附しました。所が4月27日に開かれた歳入委員会ではこの決議案を逆に21対16で否決してしまいました。ここいら辺が後に述べるように議会筋で

の政治的駆け引き（他の政策とからんだ）を思わせるものがあるわけです。これで一段落と思いきや、さにあらず。当初からオーバーライド決議の先頭を切っていたパニック議員（下院貿易小委員会委員長）は、これを5月4日の本会議にかけることを言明しました。所が5月3日の下院歳入委員会貿易小委員会では実状の調査を再びITCに要請する決議を8対4で決定したため、オーバーライド決議案を本会議にかけることは取止めになりました。こうして事態は再び、ITCの手に、ということになりそうなのがこれまでの動きです。

日米の貿易交渉もからみ政治的な 駆け引きに利用されるねじ輸入問題

所で最初に述べたように、輸入ねじの問題が政治的様相を濃くして来たというのはどういう意味か、にふれておく必要があります。

まず2月10日の大統領によるITC勧告却下の決定です。これについて、2月27日下院歳入委員会貿易小委員会の公聴会で、オーバーライド推進派議員からねじ業界は政府の国際通商政策の犠牲になったと激しい非難が行われたのに対し、シュトラウス特別代表はこれを否定したものの、もしオーバーライド決議が通れば政府に対する保護主義的圧力が加わり貿易交渉（東京ラウンド）に重大な支障を与えるだろうと警告しました。国際通商政策の犠牲になったかどうか評価の分れる所ですが、それをある意味で暗に認めているのが4月初めの、マンズフィールド駐日米大使の発言です。同大使は関西の財界首脳を前に

した講演で、日本の黒字累積が急速に改善されない限り米議会が全面的な保護立法を検討しかねないと警告した中で、カーター政権が鉄鋼や工業用ファスナーの輸入問題で議会の保護主義を抑えるため「政治的犠牲」を払った、と指摘しています。つまりこの「政治的犠牲」がオーバーライド推進派からすれば、国際通商政策の犠牲としてうつるわけです。

そのことを更にアケスケに云うのが、問題の当事者たるIFIの首脳部です。4月中旬内外の記者団との会見の席上、RB&W社ジョン・ローマン社長ら3名の首脳は、カーター大統領の措置は「事実に基づかぬ勝手気ままなもの」と非難し、「ファスナー業界は、米国政府が日本側にオレンジと牛肉を買わせるための、取引の犠牲（いけにえ）になったのだ」ときびしい言葉をあびせかけました。

こうしてみると、米大統領のITC勧告却下はシュトラウス特別代表のあげた理由もさることながら、多分に政治的な意味合いの濃いものだったことが分ります。日米共に決定に意外さを感じたのは当然のことです。

ではこの決定に反撥した下院のオーバーライド推進派やそれに対する反対派の方はどうだったのか。選挙が間近になると、議員の発言や動きが「政治的に」派手になるのは洋の東西を問いませんが、米国は今年下院全員と上院3分の1の改選が行われます。国際問題に関する限り選挙民向けの発言や行動はどうしても保守的なものになりがちです。がこうした一方では、同じく政治的に重要な法案なり利害関係のからみ合いもあるので、中々ストレートな形では現われて来ない面もあるようです。

例えば3月14日の下院貿易小委員会が7対6でオーバーライドを決議しましたが、この票決について推進派と反対派が夫々どうみているか。推進派は9対4位の大差で勝つとみていたようですが、大統領との政治的対決にエスカレートするのはまずいという一部議員の動きまで読み切れなかったようです。反対派が一番懸念していたのもこの大統領との政治的対決です。大統領がいろんな政治的配慮で決定したものが議会で否決されるこなると、政治的面目丸つぶれだし色んな面でマイナス要素が出てくるわけです。とくに国際通商の上でそれが出ると米国の国家的威信に関わるということでしょう。

また、小委員会のオーバーライド決議案が4月27日の歳入委員会で21対16で否決された点に関し、委員会の消息筋では、同じ委員会の大統領の減税計画が難航していたために浮動票が「否決」へ流れたとみているようです。つまり減税計画といつた「重要な」問題が微妙な段階にある時に、ファスナーのような「些細な」(unimportant)問題のオーバーライドで彼を追いこむべきでない、という考慮が働いていたということです。ここでは、輸入ねじの問題が政治的な駆け引きに利用されている様がよく分ります。

ただこうだからといって、輸入ねじの問題が米議会の中で政治的に弄ばれているだけのようには考えるのは正しくありません。すでに下院貿易小委員会でITCへの再調査を要請する決議をしておりますし、また大統領の指示による国防条項調査の方も財務省の手で進められていることを忘れてはなりません。とくに国防上保護する必要があるかについては、大統領決定が出る1週間程前に国防省軍備局が独自に調査した結

果も明らかにされていますし、大統領の別途指示もこれに影響されている面が多分にあるのです。この一方では問題が再びITCの舞台に移されようとしていることに、米ねじ業界関係者は安堵（あんど）の胸をなで下ろしているともいわれます。下院本会議に上提されたら、大統領

の決定をオーバライドする所か、文字通り決定がそのまま支持される気配も濃かったといわれているからです。差し戻されたITCがどんな結論をだすか、問題は更に長びきそうな様子で、その動向を注目したい所です。

(P.5より) _____
 ているということなどは、私たちにとっては一寸想像もつかないことですが、私たちにとっては一見大したことでもないようなことでも一度び立場が変わると、こんなにも問題がきびしくなるのかなと感じさせられました。

戦争になったらどうねじの需要を確保する

米国防省が2年越しの調査

米大統領がITC勧告を却下した際、別途財務省に対し米国ねじ産業を国防上保護する必要があるかどうかについて、62通商拡大法第232条による調査を指示したことは別項の通りですが、この措置は国防省戦備局（FPA）が行った調査の影響によるものといわれます。この調査はFPAが国防省の指示で2年越しに行ってきた工作機械工業の戦時調達能力調査の一部をなすもので、大統領決定が出る1週間前にFPAのロナルド・ロイヤル局長補佐がシュトラウス通商特別代表に書面を送り、232条による調査を勧告したといわれます。この内容は、戦時又は動員時に際してのねじの調達能力をいろんな面から検討したのですが簡単に紹介しておきましょう。

FPAの想定によると、米国の戦争遂行能力とねじ産業の役割はこんな風になります。まず戦争前の動員の年には輸入が急増して国内生産と需要とのギャップを埋めていくだろうが、その需要に応じて輸出を拡大できる国はカナダだけだろう。その他の国からの輸入は平和時と同じ程度でそれ以上増えないだろう、とみる。そこで検討すべき要因として6点あげています。

1. 対戦国が仮にソ連だとしても各国からの輸出増大は期待できないのではないか。
2. 輸出を期待できる国はどこで、戦場はどこか。
3. これまでの輸出国が原材料とエネルギーを入手できる度合から見ると、日本のような国は空爆などで輸送妨害を蒙りやすい。
4. 米国の要求に応じて各国にどの程度増産能力があるか。
5. 輸出国以外の国で、戦争になり自国優先という事態に直面した時、どの程度米国に好意的に供給できるか。
6. 戦争が世界的規模にわたった時輸送航路がどう変更できるか。

こう述べた後、EPAは非常事態に直面し

た場合国内産業にどの程度供給能力があるのか、どの程度の輸入が確保できるのか、これらについてのコンセンサスが全くない、と指摘しています。そして輸入の確保について現在米国市場を大きく支配している日本の場合、原材料とエネルギーの確保がきびしく制約されるので、戦争第1年目で輸出向けの生産が不可能になるだろうとしています。他方国内の供給能力はどうか。能力拡大のため設備増強を計画してもその効果が現われるのは、戦争第2年目辺りからで第2年目と第3年目の2年間で精々18%位しか拡大できないとみています。

こうみえてくると、戦時における確実な需給計画は立てられないではないかとみるFPAは、米国ねじ産業が米国の拡大する経済に立ちおけているとし、このままでは国家非常事態での要求にますます応ぜられなくなるだろう、と主張しています。そして輸入の増大に対して警告を発しているわけです。

報告は更にいろんな面にわたっていますが、これを取り越し苦勞とみるかどうか、見る立場で異なるわけです。皆さんはどうお考えでしょうか。

イワタボルトはあなたの会社の ネジ・コンサルタントです

本社及 五反田事業所	東京都品川区西五反田5丁目3番4号 TEL 東京 (493) 0211 (大代表) TEX 246-6253 郵便番号141	大阪出張所	東大阪市新喜多111-2番地 TEL 大阪 (06) (788)1466 (代表) TEX 527-7475 郵便番号577
板橋出張所	東京都板橋区赤塚4丁目6番4号 TEL 東京 (938) 6445 (代表) 郵便番号174	川崎支社	川崎市幸区南幸町2丁目7番1号 TEL 川崎 (044) (522) 4101 (代表) TEX 3842-168 郵便番号210
名古屋出張所	名古屋市西区野南町78番地 TEL (052) (502) 7761 (代表) TEX 444-3983 郵便番号461	横須賀出張所	神奈川県横須賀市長浦町1-2 TEL (0468) (23) 2724 郵便番号237
浜松支店	静岡県浜松市寺島町492番地 TEL 浜松 (0534) (54)5381 (代表) TEX 4225-195 郵便番号430	富士営業所	静岡県富士市久沢字峰畑841番地 TEL 吉原 (0545) (71) 3588 (代表) TEX 3925-487 郵便番号419-02
多摩営業所	東京都昭島市福島町380番地 TEL 昭島 (0425) (41)5534 (代表) TEX 2842-174 郵便番号196	仙台出張所	宮城県名取市田高字先井成9 TEL 名取 (02238) (4) 0265 郵便番号981-12
藤沢営業所	神奈川県藤沢市今田字西原352番地 TEL 藤沢 (0466) (44)1277 (代表) TEX 3862-124 郵便番号252	福島出張所	福島県郡山市富久山町久保田170-5 TEL 郡山 (0429) (33)6609 郵便番号963-06
厚木出張所	神奈川県厚木市下荻野518 TEL (0462) (41)7021番 郵便番号243	福岡出張所	北九州市小倉南区葛原1991-3 TEL 北九州 (093) (472) 3252 (代表) TEX 7124-30 郵便番号800-02
草加営業所	埼玉県草加市花栗町533番地 TEL 草加 (0489) (42)1131 (代表) TEX 2972-075 郵便番号340	土浦出張所	茨城県土浦市富士崎町1-17-3 TEL (0298) (24)0077 〒300
宇都宮出張所	栃木県宇都宮市竹材町字高田1081-6 TEL (0286) (21)0701 (代表) TEX 3522-320 郵便番号320	山形出張所	山形県山形市宮町5-8-7 TEL (0236) (42)2308 〒990
埼玉営業所	埼玉県北本市北中丸字上手2192番地 TEL 鴻巣 (0485) (91)2212 (代表) TEX 2942-437 郵便番号364	ロサンゼルス 駐在事務所	TEL (213) (538) 3001
群馬出張所	群馬県高崎市巾尾町491番地 TEL 高崎 (0273) (62)1041 (代表) 郵便番号370	埼玉工場	埼玉県八潮市木曾根1139番地 TEL 草加 (0489) (95) 1331 (代表) TEX 2972-029 郵便番号340
太田出張所	太田市大字内ヶ島1490 TEL 太田 (0276) (46) 1796 郵便番号373	埼玉第二工場	埼玉県八潮市伊勢野150-1 TEL 草加 (0489) (96) 9302-9256 郵便番号340

【18】 岩田ボルト工業株式会社